

通信

# あなた

7

発行・岩手県北上市青柳町二丁目 6-44・小泉麗子

百姓仕事・昭和十九年から、わたしも百姓したの。野中からここまで（現在、家の建っている場所）童（わらわ）しよって歩いて来て百姓やったの。生まれた家では百姓仕事やったことねえの。ほとんどの家の人たのんでやったからねえ。そうなの。わたしオハツコなの。へ次三男の嫁。長兄の嫁よりもさらに気を使ってくらすところか、おはあさんでいうへ（姑）とってもしいんたったの。わたしか末子の嫁たつたからたへか、奥のろとものようにしてくれて……。

わたしすなにも出来ねえから、いろいろ教えるもつたの。田植えの仕方も教えるもつた。ホレ、兄嫁さんたのみんなに教えるもつた。かじエでもらって稼たの。とにかく努めねはと助ける気たけは旺盛で、お父さんを学校で出せはは、童（わらわ）しよって、おはあさんの所さ来てなサ、肥（こ）一つも多くモッコで背負（せお）わねはわねと思つてなサ。せはなサ。背負（せお）うへと思つてもヨラヨラつてえつこううまく立ちねえけもの。モッコさ入れる時、後（あ）げえすさアツといつてすむけもの。肥（こ）束（た）重（かさ）でんからあおむけになつてすむけ

えもの。そえてもなワ。ちやんとモッコの前の方  
 さん入れてもろってすう……。前の方さん入れれば楽  
 なんだと。まっちり押えで入れればえんだと、み  
 んなに教えてもろってス。分家になつてゐる義姉さ  
 んと三軒で共同で百姓やってはあ……。田植えにみ  
 んな本家で行つて、本家もどつこのなも終つてか  
 の一番あしにござ来て植えてもろつて百姓ゆつ  
 たの。家建でがらも時節には、まるつきり本家さ  
 行つて助けて百姓やったの。

居場所。とすてるうらに、義兄さんたら、滿洲  
 から引き揚げて来たの。居る前ねえめんぢや……。  
 さア、こんど家建てねおねエ。実家の父親かね家  
 すとくえすまも、他の家に居たつてわかねんだ。  
 あめえた、錢ためて家建てゐるなんて、一生出来ね  
 えた。小屋コでもなんでもえんだから、借金し  
 てもえんだからやれしつていうのす。自分の家さ  
 入らねは駄目なんだつて……。父親は、家の分家  
 てねエから、家ご相談すたつて駄目たつて……。  
 あめえは鍋倉で嫁らえたのなんだから、鍋倉本  
 家なんだから、何事もあつたのいうようにして、

世話にならねえねしたス、そえてもわかねえ時は  
 オラも援助借すまねじと、なにでもあつたんだ  
 つて、「おめエ、家の人でねえから嫁た善たから  
 して、こら言うけもの。オレもいろいろ苦すれ  
 は家さ行くよりほかねんだも。父親は、行けば黙  
 つては奥で寄すすとも、そういう風に言うて教え  
 たつた。一錢もなくてもやれつて……。借金払い  
 かねたす手ねんだはかり言う父たつた。

### みなのもち。義兄さんと親は、田さん一人てしよ。

あとは甥コたつたもの。本家で嫁せて助けたわ  
 したらてねエもの。たれ、農ラと思つてちのまぢ  
 かい。母親に、こんさへ現在の土地を賣つてら  
 はんもありかてエ話したもの。うたかあね。人の  
 とつたなの当てるにすわねいねえけれとも、ま  
 ず相談たけはすたけれとも、「二人すてやれたら  
 やつてみろすよな事こそ言われたけれとも、ま  
 す、なにもすてもうえねかつたわけす。その中に  
 入つて、加藤の母親、うんと苦勞すたの。

うてもス。お父さんへ夫ははね、天貞嬢は  
 人でス。ゆるたらゆる。そういう意志の強いとこ

もある人だったかろね。人の痛さいたさも分るス、借金も元と。入る所ねえのほじうにもならねエかろなり。

江釣子のおじさん稟会やってて、管林置の払い下げあるからって言われて、川尻で桑木買って、父と大工さん行って製材してなワ。お金支払うのも父が見かねて、「借すのだから」って言って払ってくれて……。そのうちに、十五坪をか建てられぬウツたワカはすれで。父はネ。あじて足してくのは容易じゃねえと、借金すても、兄弟は皆さ詰すて援助すてもらって、それでも足りねエときは家いえでも援助するからって言うごとで三十坪にしたわけ。信に。加藤の兄弟たち、それこそ横川目の菊池敬一さん、ニツペさ行ってゐる義姉さん、その人たちがも行つて訪したら、心良く援助していただいてス。奥家の方の大工さんだったかろ事情を分つて、奥家の山さ行って、こす切れあす切れって買ってきて、まず、借金もしたけれど、建てたわけス。二十一年に建てた、その時のままの家だから、いま時、こつたな家はねえんだ。

過勞。たった一つ（茶の向）困つて入ったの。いままでえにスツルリ出来上つてから入った家でねえたあ。こゝなんか、なんにもねエの。板二敷いであつらの部屋などはひよう通し。何年とどうやってんの。

どしてゐるうちに、二番目のろとも亡くしたつたの。大工さんさは、ご飯から作つて食せねエねス。糞せかねエねス、わたす、胸悪かつたの。あんまり過勞で……。わたすも弱いから、そのろも弱いらつた。まず、一年間は家さ寝でろの。銭ねエたもの。おらほで買ってくる材料は大工さんさの支払いみてえなもんで、ろくなものは食ねエ。そうたつて、助けろえでろ人たろさは急せねはねエ。わたす、ほんとうは栄養失調から病氣になつたんだと思ふ。もともと丈夫ではねかつたともね。わたし六年間病氣した。三年間は仙台の大宮病院に入院してろの。いまのかんのようなもんだつたがサ。不治の病いで。肺病たかりなつて、みんなにも嫌われでなツス。

(つづく)

へ和賀助藤根・加藤アツ子さん・53歳・談 ✓

## 旅の坊さん

No. 7

むかしむかし、一人の坊さんがあったけすあ。會をてわれの寺も持でなくて、旅かう旅を歩き廻つてゐる坊さんたけすあ。坊さんは、まようもまた白暮れになつたナ、じこか宿みつけねほじ思つて、一軒の百姓家をたすねて、

「今夜、なんじか、宿なすなとんで、やさねしてゐる番だか泊めてもらいてたしてゐたすナ。そしてたは、その家には、あか一人いて、

「あや、すかたねえ、おれの家では、主人かねえくて、泊めることは出来ねたかしと断られたすあ。旅の坊さんは、そたは

駄目なんたなじ思つて、次の家で行つて頼んでみたは、この家には主人かえで、もともそじ話したけすあ。

「この村では、悪い病気が他から入つて来たり、人殺しがあつたりしたあどて、気の毒たか、泊めること出来ねえ、そのかわり、今夜の飯は、おにまりにして上げるし、なんたて、泊めること出来ねえ。明日の朝まの飯は、また朝まになつたらう、こしえて上げるから、村のすつとはすに、あき寺あるから、そこへ行つて泊つてけろしと言われたじ。坊さんは、しかたねえ、村のはすまで歩いて泊ることにしたすあ。

あき寺たから、夜ねるたて夜具もねえたもの、焚物見つけて来ては火をたき、煮つたにきり飯を食つて、腹らえぐになつたら疲れとてで、はあ、眠つてしまつたけすあ。

したは、夜中に、かちチャツとした物音で、目さめたけす、見たは、炒の火のそばに、大きな茶釜があるけすあ。坊さんは、夢もねえへし、ハア！テす、あかすそじ思つて、またよく見てらは、その釜から、ホッホッと湯気立ち始めたけす

あ。としたは、こんたあ、なにか言いはじめたけ  
すあ。

「ふんふん茶釜のすっこんこ、とんつくふるへい  
しの、かーけがおんとし」

坊さは、こりゃ、したり、

「何が、化けたのだへ、何かの古物が化けたのだ  
へか」と、思つて見てゐは、また、湯気をホソホ  
ソと音立てながら、

「ふんふん茶釜のすっこんこ、とんつくふるへい  
じのかーけがおんとし」と、続けるけすあ。

坊さんは、ヨシヨシ、そだばつちにも考へか  
ある。ぞつたる音(とつたる音)になんぞ聞けないぞと、くりの(まの音)

すみっこの方から、餅をつくまきを(まき)見つけて来て、  
片肌抜いて、体抜きかけてかけ合ひ始めた。

「ローちに、とんつく、にーなかへ、三に裸でし  
つけるへ、とんつく、古さーきの、かーけが、お  
んとしと言つて、まきを炉ふちに、ドンドンとつ

まながら、茶釜に掛けられねえと、

「ふんふん茶釜の、すっこんこ、とんつくへーい  
じのかーけがおんとし」と、さかひ、茶釜も

「ふんふん茶釜の、すっこんこ、とんつくへーい

のがかーけがおんとしとかけ合ひ、片体ぬきでて、  
汗ふきふき坊さん声はりあけて、

「ローにとんつく、二ーなかへ、三に裸でしつける  
へ、とんつく古さーきのかーけがおんとし」と、続  
けたすあ。

だんだんと続いていしたは、茶釜のふたっこもす  
れで声弱つて、

「ふんふん、ふんふん、ふんふん、ふるへいしの、へい  
しの、……しと低い声になつてきたけと。坊さん

は、そりゃ、負けたへえ、と言つてだんだん勢い出  
してローにとんつく、二んなかへ、三に裸でしつ

けるへ、……しと炉ふち叩きながらせいつけて、  
たんが、たんがと続けるけすあ。茶釜はあ、くな

くなすく弱つてしまつた声して

「……ふるるへ、ふるるへ、ふるるへ……」  
と言ひながら、くりのすみっこの方さころけて、

見えなくなつてしまつたけすあ。坊さんは

「さまあ見ろ、何つたつて、おれにかなうめえし  
と、片肌ぬきの着物あけあけ座(ま)つたけす。じつち

か勝つが、喰うが喰われるかの境なんだから、命  
かけにやつたのだつたじ。

涙みこゑが大汗ふいで、一休みしたは、東の方  
しろしろと明け始めで、村の方から一番鈴こ鳴く  
けす。

「ココケコノヨワー」と聞こえたけすあ。

坊さん、やっと生き返つたように、大にめいき  
ついでろとこさ、夜んべ宿頼んで見た主人か、朝  
飯待って見えたけし。坊さん元気を容ていたの見  
たは、奇妙な面してつけつけと語るけと。

「いままで、なんほか旅人をこのあき寺で、あし  
えて泊るによこしたか、朝まで生きた人はなかつ  
た。それで、やさねえくて、こうして朝飯待つて

きて見たのたが、何者もいなかたもんだへか。  
あだりの人の訪たと喰い殺されると言ふ訪たつた  
か……」と、言つたは、坊さんは

「茶釜か出てきて、いーちに、とんつく、にーな  
かへ、……」して、茶釜とやりあつた夜んべの話  
の一部始終語つたけすあ。

したは、村人、まなくハッチリとあけて、本堂  
や、くりの裏の方見廻り始めたは、くりとの水屋  
の向の水のそばに、ろこ馬こくりえの体で、もか  
針のような古狸が、ひこひこ虫の息で倒れてら

つたけあ。村人は、  
「これだ、これだ、この古狸だ、きつとこの寺の  
住職の坊主も、旅人もみんなこの古狸に喰い殺さ  
れたのたしつて、二人で手たもすきあつて、化物  
還治したと喜んであつたけあ。  
しとより坊さんは、われの寺もねえとんだから  
そたは、この住職になつて、住みすいでけるす  
ことになつたけと。その寺は旅人も来るようになつ  
て、また栄えたけと。

トンピンハラリノフ。――

語り手・石川ツナヨ（七十七歳）

沢内村大野

再訪・武田礼三



■四年前、ここへ移った時、十クラスしかなく敬室が半分空だったのになんと家が建ち並び、あつたさという向に二十六クラスになり、今年はフレハス教室八教室があり、真次も二年生で六租全部がフレハスに入っており、フレハスは豊くこうるさくて、やりきれないそうさ。

交野は九年まで人口三万に充ない村でした。今は新住民が半分をしの、人口は五万人を越し、五年前市になりました。工場のない田園、生駒山系の麓、家を持つなら絶好の地というので、田地一つ出来たら、山かくまされ、田ほは宅地へと早変わり、四年前藤が尾田地かてさ、また星田地区も宅地化してききました。交野は、交野村と星田村との合併で、三十七区交野町になったそうです。星田は財産(山)があり、昨年、府に府民の森を十七億円分で売り、私たちが住民にもいくらかの新代なるものが配られました。新しい住民まであかしなことです。いま頃、入会権がてきて争われています。入会権が認められると財産は

旧星田の入会権を持っていく人達のものなそうてす。在の人たちは、すごい大きな家に住んでいてあつたさ、あ、お寺、神社、池など、村としての要素があつたにありませう。新しい住民はなあさうさういうところを求めて動きまわり、任と、新住民のいりまじったところは、なにかもう一つし、くりしませう。環として、自分たちが育った村を求め、考えとしては都会的なものを出す矛盾というところかもしれませう。現に、私も成田(北上市飯豊町成田)へは帰りたいくありませう。といつても、住むには、成田とかかわりのない「村」を求めるとす。

大阪府交野市藤が尾一丁目四番四七二〇七号  
梅 内 貞 子

■十月に入り、ここ九州でも朝晩はめっきり涼しくなりました。でも日中はまたうっすらと汗はむほど太陽がさんさんと照り輝いています。

四月八日、女児を出産いたしました。名前はまだ、自分の道を歩め努力する子に、との意味です。夫は路ろというのかかわりしいし、女性ら

しいと主張しましたが、私はやっぱり、みぢは道  
 志なくてはならないとがわりました。夫は女の  
 うに道という字は厳しすぎる、女のうに期待する  
 のはかわいそうだ……と言いました。こゝ私は  
 自分が女だから、やっぱり娘に、このうはどうい  
 う生き方をするだろう……というふうに私をの  
 りこゑるだろう……と夢をもち、期待するのです。  
 もし、男のうだったら、私はそれほど強くこの  
 思いを持たなかったのかも知れません。

佐賀市中の館町四く三・吉中 由 姫 子

この間、五木賣が、テレビで言ったことです。  
 「弘田三枝子かやあなただの腕の中で、わたしは小  
 ぢやくなる」というような意味の歌を詠ったとき  
 アメリカでは「わたしはあなたの腕に抱かれて太  
 さくなる」というような意味の歌が流行っていて  
 日本では男と女が愛し合うと、社会から疎外され  
 てしまつて萎縮して弘田三枝子の歌のように小さ  
 くなつてしまふような気がする。ほんとうは男と  
 女が愛し合つたら、それだけお互いに世界が広が  
 つて大きくなるんじゃないと思つてです。」と。

男も女も、ひとりの男、ひとりの女を送つて生活  
 を始めてしまふとほんとうに、五木賣のいうよ  
 うにまるむ世界が狭くなつて小さくなると思つ  
 く思います。結婚というのはお互いに新しい縛  
 るものがあります。わたしはMと、いい男とセに  
 かりたいと頼っていたけれど……。わたしはわた  
 しに腹立しいことは、この家にいると、どうして  
 も自分で自分を抑圧するものがあるということて  
 す。わたしはもつと自由にふるまいたいのにな、と  
 うしてもオドオドするものがあります。あくらそ  
 かいをリンゴをかじつたり、大の空に寝て鳥をそ  
 をほいくつたり、そんな時がなくなつてしまつて  
 から、わたしの神経はどうもイラ立つてはかりい  
 ます。良専貞因くどくらんと思つてゐることて、  
 わたしのだらしないさを正当化しています。

和賀市藤根12の窓 ・ イトウ 音 子

「橋を渡る日マシ・石の、あの」にありしとい  
 うのは、芭蕉が連句で言った「にありしに通じて  
 いると思つと、ものすこくおもしろかつた。」

盛岡市上堂一の八の五二・工藤 忠 彦



# 女中奉公ということ

についで

×月×日

東京の若い作曲家・吉岡しげ美嬢の作曲個展に招かれて東京まで出かけてきた。

武田礼子さんと、石川純子さんが連れだって行ってくれた。二十年も前に書いた自分詩に、曲が付くのかと、物好きな作曲家にあきれおしたか、いまはそのコンサートの様様に触れることではなく、それを報じた新聞の記事について書いてみたい。新聞の記事はこのわたしを紹介して、こう書き添えてもいる。

「小京さんは貧しい農家に生まれ、静岡県沼津市へ女中奉公に出されるなどの苦勞を重ねながら、……」と云々と。テレビのコマーシャルに出てくる佐久間良子にあらずとも、「ちかいます。それはちかいます。」と言いたくなるうというものが、誰も見えていないところで、佐久間

良子のような容態で瘦するわけにはゆかない。貧しくて女中奉公に出されたというよりは、自分で出かけて行ったのだと言いたいのである。

昭和二十六年のわたしの地域では、貧しくて高校に進学できなかったは、あたりまだった。それに女中だから、学向させるよりは、田畑の仕事をみっちり教える、一人前の働き手として働かせるということも、あたりまえであった。高校卒業の資格は、花嫁のよい条件ではあるだろうが、それは限られた家の娘のことであり、まして「学歴」が借金や恥種に影響を与えるだろうという考えもあまり定着してはいなかった。「学向」の中味とは、畠の土を鋤で切る作業ほどには明確でもなかった。学向すれば、礼じき（礼儀作法）のよい娘になるだろうか。それならば高校に進学させるだけの財力のない畠は、女中奉公に出して礼じきの良い娘にしてみようという方法ももちろんあった。学向イコール礼儀作法。もちろん「花嫁修業」という言葉も生きていた。十六歳から十八歳まで、中学の同級生の何人かか高校生活を終えるまでの間、わたしは家で農作業を手伝っていた。一人前

の「嫁し」して、嫁がせるに足りる訓練を受けていた。といえはいいのかもしれない。西について他の家の田畑の作業の手間取りにも出だし、農

閑期には近くの製板工場にも行って働いた。部落の中に娘が十人いれば、九人までがそうしていた。もちろん小遣銭は自分で稼いで得るものに決つて

いたから、製板工場での仕事はあおいに助かつた。嫁支度らしいもの一つとしてゆれなかつたことを、母は親の甲斐性なしのようになうこともあ

つたが、自分で働いてという方法を逆に号ひ身につけた「生活し」かそこにはあつたという気がする。オ一、嫁にもらわれていくことを、拒み続けて

いたのだから、嫁支度をしようにも出来なかつたのたろう。高校を出た畜も、嫁に行くぞうたとい

う年の三月、わたしは沼津の魚ひりき屋に台中として働きに行った。親ごころを受け入れて嫁にも

らわれて行くこととか、親孝行であつたのたから、親ごころを拒みつけて、ついに親不幸に死つたといふことでもある。

中学を卒業したら、紡績工場に行こう。働まなから号べるぞうた。紡績工場の生活か、台中生活

と変わらないものであるにしても、働まなから号へるといふ文句からは、「自治」への夢を見せても

いた。中学を出て三五年、農作業を手伝ひなかつた足らむしては、わたしは、その「自治」を夢見て

出郷したのである。「金貸しい豊村から台中奉公へ」という時代よりは下つていた。いや、金貸しいこと

には変りなかつたが、その金貸しさには、進学さびることの出来かい金貸しさという色合いが加味され

てきつたある時代でもあつた。その取力かたいからというて、親は責められるべきでもなかつた。

た、わたしは腹を立てていたことは、「台中」だからな、学校に入れたつてか、それよりも

嫁ごにけるたしという一言に対してであつた。台中に居た本が読みたかつた。嫁に行つて本が読めるか、いまのうらたもの気ままさせであけしという言葉通り、嫁の時よりはいつぞうと水か出末の色ひらき、家をだす。それである。わたしは津の色ひらき、家をだす。それである。わたしは

たか、う記手てわれることかを拒んで、台中奉公に行つた。この自分のたいしいな分れ目なのである。新聞の記事通りをあれは、わたしは自分で自分を見失つてしまつていふことになる。